

ゴリラは市松模様の夢を見るか？

安藤郁哉

吾輩はゴリラである。名前はまだ無い。

いや、名前はあったか。動物というだけでこの語りから入らなければならないという如何とも言い難い使命感に駆られてしまった。

名前はニジュという。いつも世話をしてくれる人間が言うには「この方が名前らしいから」とのことだ。よくは分からないが、名前を付けてくれるということはそれなりに愛着らしきものを持つてくれているのだろう。それ自体は存外に悪くはない。

私が暮らしているのは手狭な檻の中だ。適度に柔らかい土が敷かれてはいるが、白い壁しか視界に映らないのは味気なくていけない。それにこんなに狭くてはまともに動き回ることもできない。これでは居を共にするというよりは閉じこめられているようだ。

いや、実際閉じこめられているのだろうが。



その日、目覚めてから少ししてあの男がやってきた。頭に少し毛が乗っているだけで、私たちのような顔でありながら毛の量が少ない。その代わりなのか、妙にひらひらした白い服を纏った風変わりなオスだ。黄色い肌をしたそいつが『人間』の『ニホンジン』というものなのだと、ここに來てから知った。

「お早うニジュ。それじゃあ、早速今日のノルマをこなそうじゃないか」

いつも通りの挨拶をする男。その言葉が私に投げかけられて初めてこの檻から出ることが出来る。

開けられた扉をくぐって檻の外に出る。ふと横をみると、窓の向こうに、雨粒が見えた。どうやら今日の天気は雨のようだ。

ここに来る前は、匂いやら気配やらで、雨がいつ降るのが分かったが、ここはつるつるした匂いしかない。清潔すぎて、生きている感覚がない。

人間の後をついていく。鎖が繋がっている訳でもないが、この場所ではこの男に従うのが吉であることは心得ている。他にも幾人かの人間を見かけたが、どいつもこいつも、目の前をいくこの男に頭を下げている。それがこの場所での平伏の証らしい。

辿り着いたのは、檻よりも幾回りも広い部屋だ。ここも味気ない白い壁に覆われているが、あの場所よりは色味のある物が置かれている。

「さてニジュ。早速だが、朝食がてらいつもの反復だ」

そう言っつて男が取り出したのは、三色の箱。赤い箱、黄色い箱、青い箱の三つだ。赤い箱の中にはバナナが入っていて、それ以外は空っぽだ。要するに、私が『赤い箱の中にバナナが入っている』ことを覚えていてのかのテストらしい。

私は迷うことなく赤い箱を選び、中のバナナを口にする。ここに來た当初はこの妙な黄色い食べ物に面食らったものだが、今ではこの食事が当たり前になっている。

「ふむ、今日も問題ないな。色覚、記憶力ともに正常……と」
何かをぶつぶつと呟きながら、人間は手を動かしている。恐らく何かしらを書いているのだろうが、その中身を見たことはないし、見たところで私には分かるはずもない。

男は、私がバナナを食べ終えたのを見るやいなや、さつさと箱を片付けて、部屋の隅から次なる道具を出してきた。

いやに凹凸の多い支柱から、波打つような脚を三本生やした丸い天板のテーブル。天板には白と黒の正方形が交互に並んだ模様——市松模様と言うらしい——があしらわれている。そしてその正方形の模様それぞれ置かれた小さな彫像。規則正しく並べられた状態のそれを、男は『チエス』と呼んでいた。

「さて、朝食も済んだところで、復習といこうか」

そして、そんな彫像の中から、男は一番数の多い丸頭の黒い彫像を私の前に置いた。その斜め右には、同じ形をした白い彫像が置かれている。

「さあニジユ、黒の『ポーン』を動かしてごらん」

男は黒い方の彫像を指さす。仕方がないので、昨日覚えた通りに黒の彫像で白い彫像を弾き、白い彫像のあった場所において見せた。

それをしっかりと確認すると、男は手を打ち鳴らしながら「すばらしい、流石ニジユだよ」と、賞賛するように言った。

丸頭の彫像はどうやら『ポーン』と言うらしい。指を差されたので動かしたただけなのだが。

「実に素晴らしい、やはりゴリラも知能の高い霊長類ということだね。そのうち君には、うちの職員のうち誰かとチェスをして勝てるぐらいにはなってもらおうよ」

気分が良いのか、実に流暢に口が回るようになった男。この男とは数年来の仲だが、どうやらこの男が意図したとおりに私が動くことと喜ぶらしい、ということも最近知った。

だからどうしようという話でも無いわけだが、わざわざ怒らせるのも大人気ないだろう。私の不利益にならない間は、この男の指示に従うのも吝かではない。加えて、不本意な話ではあるが、この男に従わなければ明日の食事も怪しいときている。生命線を握られては、そう易々と反旗を翻せやしない。

その後もビショップだのルークだのと訳の分からないことを言っていた男だが、言葉の音と彫像の形を覚えておくことにした。生きていく上で微塵も意味を感じないが、それが知恵ある者の余裕たる『娯楽』という物なのだそう。人間というのは、もう少し生産的な余裕を持ってないものなのだろうか。

そうしてどれぐらいの時間が経ったのだろうか。もう何度目かも数え切れない低い音が部屋に鳴り響く。時計の短い針が『8』を刺している。

「おや、もうこんな時間か。まだ駒の動きを教えている最中なんだが……まあ仕方ない。ニジユ、今日はもう終わろうか」

そう言って男はチェスとテーブルを片付けると、私を伴って部屋を後にした。

既に廊下の明かりは僅かしか灯っておらず、鼻を摘まれば流石に分かるが、向こうから誰かが来てもそれが誰かはわからないだろう。煌々と明かりの漏れる部屋から、私の住処である寒々しいばかりの檻へと帰る。こうして私の一日は終わるのだ。

何回かの休憩と食事を挟みながらの作業であった。私がこの場所に来てからというものの、連日のように繰り返されている。妙な形の彫像をひたすら覚える作業だが、それを嬉々として行わせ

る男は、どうしようもない変わり種であると信じたい。

まさか、人間という種が誰も彼もがこんな生き物ではあるまい。人間以外の動物に、飽きもせず無駄な知識を植え付けることなどせず、もう少し意味のある行動を尊んで欲しいものだ。



窓の向こうの雨は未だ止まない。が、体を濡らしもしない、ましてや匂いも音もしない雨など、私にとっては全くの無意味だ。

元々の住処から離れてどれぐらいになるだろうか。もうどんな匂いであつたかも記憶から遠く、色褪せてしまっている。などと、感傷に浸るのも、人間の領域に長くいるせいだろうか。

ここに来ていくらか解つたことがある。我々が日々生きることに腐心するように、人間は意味のない行動に尽力するようだ。天敵がいない、生活圏を脅かす外敵がいない彼らは、生きることが特に意識して行うことではないらしい。

だが、鳥が空を飛ぶように、魚が川を泳ぐように、我々が草木を摘むように、人間というのは知恵を研鑽する生き物なのかもしれない。

我々は生きている時間をそのまま『生きる』ということに費やすが、人間は生きる時間を『何かを成す』ことに費やしているのかもしれない。

などと考えてみても、所詮は違う生き物。分かり合えないし納得もできるはずがない。結局はこうして、葉を敷き詰めた寝床に体を横たえることしか意味はない。月の光のない檻はいつも以上に殺風景となっていた。

願わくは。かつての故郷の夢を見られればいいと、私はそつと瞼を閉じた。